

44

## 味岡三伯一門の薬性薬効論： 『薬性知源』『本草拔書』『薬性記』とその講義録

吉川 澄美

東京都

味岡三伯（1629–1689）は曲直瀬道三一玄朔に連なり後に分岐した饗庭東庵に師事したと伝えられ、この一派は医経の講釈を得意としたことから「素霊派」、そして優れた弟子「味岡の四傑」を輩出したことで知られる。しかしその医学の実態は、少なくとも薬治については今まであまり正面から取り組まれて来なかった。例えば、既成の方剤に拘らずに、患者ごとにオーダーメイドして一味ずつ組み立てる「一味配剤」を流儀としていた事は、2015年大会にて『続医学至要鈔・寛文配剤記』の処方例を筆者が示す以前はあまり認識されていなかった。彼らはまた講義用に教材を編んでおり、例えば処方設計のおよその原則は『内経拔書・治法』、さらに生薬毎の基礎知識については『本草拔書』や『薬性記』を使って説いていた。それは「薬方を立てるには彼の本草拔書、薬性記の書を本にして一葉ずつ性を能く吟味して之を立てるなり」（『内経拔書』岩瀬文庫蔵）という文からも察せる。「一味配剤」を流儀とする以上、生薬の効能と配伍についての習得は必須であり、これら教材編成や教授法については少なからず力が注がれてきたと推測される。そこで、味岡三伯一門にちなんだ薬性薬効論に関わる文書を以下の①～④のグループに分けてその特徴を調べてみた。

①『薬性知源』（漢文、写）：杏雨書屋本、岩瀬文庫本が現存し、175種程度の生薬について『本草綱目』や『本草約言』（薛己1486～1558）等から効能に関わる文が引かれる。また所々に「麻黄桂枝之弁」「天麦門冬之弁」等の表題を掲げて二薬の比較論述も交える。また生薬の配列順にも類別化や組合せの発想が反映されている。

②『薬性知源』（和文、写）：①とは構成、内容も異なり富士川本、国会白井本、岩瀬文庫本が確認できる。若い頃、賀州金沢にて古沢道悦から『薬性記』の講義を受けて感銘を受けた無名氏が、後に上京して浅井周伯から『本草摘要』の講義を受け、さらに両書の特徴を生かして編んだものである。百余りの項目を立て、その内65は2味以上の薬味の組合せで、項目以外にも組合せが「かけやい（掛合）」や「くみやい（組合）」として解説されている。本書の構成や論述様式から味岡一門が、2味の薬味ペア（薬対）を主に4味程度までの少数の薬味セット（組薬）などの生薬の類別化によって、一味ごとの選別のコツを教えていた事がより鮮明にわかる。

③『薬性記』系文書：要点のみの無註本の他に松岡玄達筆『薬性記備忘記』や『秘伝薬性記』（1688年刊）があり、講義内容が窺える。岡本一抱の『六十味薬性弁断』（1699年刊）にも特徴が反映されている。構成上の共通点は、当派の三蔵論を反映した10種の薬効門に分けて60味に絞って気味効能を説く事にある。内容は、「日本にてこの薬を調べあわせて用いて試みたるを記した」（『薬性記備忘記』）とあり、既存の本草書に記されたものとは異なることも含むと宣言される。例えば婦経に依存せず和語を使って効能を説き、時に因果的説明を採用しない代わりに「自然に」や「自ずから」としてその性を説く。さらに該当薬味が含まれる代表方剤を挙げたり、他の薬味と比較したりして、配剤における使い分けを述べている点も特徴である。

④『本草拔書』（写）ならびに『本草摘要』：『神農本草経』や『本草綱目』等の抜き書きから成る『本草拔書』は国会図書館白井文庫等にあり、『本草摘要』として浅井周伯により1697年に刊行されている。松岡玄達筆の龍谷大学写字台文庫『本草摘要講義』、『本草拔書』（加賀文庫・刈谷文庫）、『本草摘要口義』（杏雨書屋・白井文庫）等には講義内容が記されており、『薬性記』系文書との関連性についても推察できる。

以上挙げた4種の文書は相互補完的であり、同時に当門における文献依存の薬効学説から「自ら試した」記述重視への変遷、ならびに薬効薬理概念の表現様式の変遷が窺い知れる。今まで味岡一門の薬効論の詳細な検討は、行われて来なかったが、所謂後世方派の能毒系や古方派の薬効論との関わりについても史的検討の余地があるものと考えられる。